

## テーマ 読書嫌いの私が出会った本 〈小さいうち〉から〈青春の終わり〉・〈お別れの始まり〉まで

難波知子先生(生活科学部人間生活学科・生活文化学講座)

正直に白状すると、読むのも書くのも大嫌い。なぜこの仕事に就いたのか、自分でも謎です。そんな私でも、子どもの頃にいくつかはまった本があったり、学生時代にたまたま父が図書館から借りてきた本を読んで、その時の自分にぴったりだったり、不思議なご縁を感じる本がありました。ここにご紹介する本は、決して厳選吟味したものではありませんが、思いつくまま、何か心にひっかかったものを選びました。本はそれぞれ読むタイミングがあると言いますが、誰かの「今」読むべき本や気軽に楽しくページをめくってもらえる本が一冊でも含まれていれば幸いです。

書名 / 著者等. (出版社, 刊行年月, シリーズ名)	請求記号	配架場所
のはらうた / くだらなのおここのはらみんな。(童話屋, 1984)	911.5/Ku17/1-5	図書館オープン書庫(一般図書)
いつ頃読んだのかは忘れてしまいましたが、へびいちのすけ「あいさつ」(I巻, 44～45頁)が印象に残っていて忘れられません。自分のからだの一部なのに、まるで別人格があるかのように、“へび”とへびの“しっぽ”が会話している様子が面白く、「そんな表現の世界があるんだ!」と、新しい見方がひろがったことを覚えています。かまきりりゅうじ「おれはかまきり」(I巻, 70～71頁)も、夏になるとふと思ひ出す、お気に入りです。それぞれチャーミングな名前をつけられた生きものたちが語ることば、それらを通してひろがっていく世界を声にだして読んでみたくなる一冊です。後から知ったことですが、くだらなおこさんはお茶大の卒業生だそうです。		
こぶたはなこさんのおべんとう / くだらなおこぶん ; いけずみひろこえ。(童話屋 1983.10)	376.1/Ku17	図書館絵本
『のはらうた』と同じく、くだらなおこさんが手がけた絵本。子どもの頃、“こぶたはなこ”さんが大好きでした。なかでも、おべんとうをつくってお花畑にでかけるこの絵本がとくに好きで、食べものがおいしそうに描かれているところや、“こぶたはなこ”さんの食欲旺盛ぶり、その“こぶたはなこ”さんをあたたく見守る”こりすすみえ”さんとの友情が素敵です。終わりにはふたりの部屋の様子が描かれていて、じっくり見ると、それぞれの性格や好みが垣間見られます。今考えてみると、私は暮らしの営みや風景に興味をひかれる子どもだったのだと気づかされます。当時、読者はがきを書いて送ったら、くだらなおこさん本人から直筆のお返事が届いてびっくり。今でも大事にとってあります。		
大きな森の小さな家 / ローラ・インガルス・ワイルダー作 ; 恩地三保子訳 ; ガース・ウィリアムズ画. (福音館書店, 2002.6. (福音館文庫, S-1 . インガルス一家の物語. 1))	933/W73	図書館一般図書
[関連展示] Little house on the prairie / by Laura Ingalls Wilder ; illustrated by Garth Williams. (HarperTrophy, 1971)	933/W73	図書館洋書ペーパーバック
有名なのは『大草原の小さな家』かもしれませんが、インガルス一家の物語の第1巻は『大きな森の小さな家』。小学生くらいのときに、シリーズを読破しました。舞台は1870～80年代のアメリカで、大森林や大草原での開拓生活のなかで成長する少女ローラとその家族の物語です(全5巻)。お金を出せば何でも手に入る現在とはちがいで、暮らしに必要なあらゆるものを手づくりしなければならなかった時代の、厳しさと豊かさを感じさせてくれます。お父さんは家も建てれば、食料調達のための狩猟(鉄砲の弾も手づくり)や獲物の解体から皮なめし、保存食作り(燻製器も手づくり)まで何でもします。かと思えば、家族を楽ませるためにバイオリンも弾くという多才ぶり。お母さんの家事仕事も目を見張るものがありますが、男女とも当時の人びとの生活技術の高さ、幅広さに圧倒されます。ある年代までは世界のどこでもこうした暮らしがあったのでしょう。失われてしまったからこそ、少し憧れます。		
小さいうち / 中島京子著。(文藝春秋, 2010.5)	913.6/N34	図書館一般図書
[関連展示] 小さいうち / 山田洋次監督.	778ZZ1-vd/Y19	図書館視聴覚資料
2010年に直木賞を受賞された作品。心ひかれたのは、書名と同じバーニジア・リー・パートンの絵本『ちいさいうち』が好きだったから。中島京子さんの作品にもパートンの絵本が出てきます。加えて、人びとの暮らしに興味のある私にとって、「女中」という気になる存在が主人公であったことも、たぶん心にひっかかったポイント。小説を読んだあと、2014年に公開された山田洋次監督の映画『小さいうち』(主演:黒木華)も鑑賞しました。映画には小説だと描かれない家の内部の様子や登場人物の服飾も細かく設定されていて、見ごたえあり。松たか子さん演じる時子奥様のモダンな髪型やきもの、平井家の旦那様の着替えのシーンなど、昭和初期の衣生活が表現されていて、映画鑑賞もおすすめです。		
ちいさいうち / バーニジア・リー・パートン文・絵 ; 石井桃子訳。(岩波書店, 1981.3)	376.1/B94	図書館絵本
この絵本では“うち”のなかの様子は描かれていませんが、“うち”を取り囲む外の世界がどんどん変貌していく様子が描かれています。ストーリーもさることながら、パートンの描く挿絵も好きでした。“うち”のまわりの風景や人物が細かく描かれていて、色づかいも素敵です。最後に“うち”が居心地のいい場所に移されるストーリーに安心しつつ、一方で「家って運べるの!？」と驚いた記憶があります。今でも「曳家」(建築物をそのままの状態に移動する建築工法)ってすごいなと感じます。お城だって、ホテルだって、そのまま運んでしまうのだから。いつか私も“ちいさいうち”を建てて、お気に入りの家具で部屋をしつらえて、楽しく静かに暮らしたい…と夢見ています。		

書名 / 著者等. (出版社, 刊行年月, シリーズ名)	請求記号	配架場所
博士の愛した数式 / 小川洋子著. (新潮社, 2003.8)	913.6/O24	図書館一般図書
[関連展示] 博士の愛した数式 / 小泉堯史監督.	778ZZ1-vd/Ko38	図書館視聴覚資料
<p>こちらは先に映画を鑑賞してから原作を読みました(映画は2006年公開、監督:小泉堯史、主演:寺尾聰)。家政婦役を演じられた深津絵里さんが昔から好きで、博士役の寺尾聰さんも役柄にぴったり合っていて、映画では静かな環境で穏やかに営まれる暮らしの風景が魅力的です。「記憶が80分しかもたない」数学を愛する博士が、家政婦とその息子に語る数のもつ美しさは、数学とあまり縁のなかった私にも面白く感じられました。それ以外に小説『小さいおうち』の「女中」ともつながる「家政婦」という存在が、私にとってはどこかひっかかる場所がありました。「女中」や「家政婦」(今では男性の「家政夫」さんもご活躍)の仕事内容や役割から、家族のあり方も見えてくれば、一つ一つの家事仕事をもつ豊かな世界が垣間見られるように思います。家事ってどこか面倒くさいイメージがあるけれど、部屋を掃除してお花を活けたり、お料理を美しく盛ったり、洋服にびしっとアイロンをかけたり、気持ちよく暮らしていくための工夫や技術がつまっています。家事や暮らしの必要最低限に加えらるる+αに美意識や時代性があり、きっと博士も家政婦さんの手際の良さに、数学に通じる家事の美しさを発見したのではないのでしょうか。</p>		
青春の終わった日 : ひとつの自伝 / 清水眞砂子著. (洋泉社, 2008.9)	910.2/Sh49	図書館一般図書
[関連展示] 影との戦い : ゲド戦記 / ル=グウィン作 ; 清水眞砂子訳. (岩波書店, 1992.3)	080/D83/100	図書館一般図書
<p>『ゲド戦記』の翻訳者(児童文学批評)として知られる清水眞砂子さんの自伝。幼少時代から大学時代までを振り返り、その後高校教員として勤め始めて数年後に迎えたという「青春の終わり」。「青春」とはいつ終わるのか、その時どんな気分なのかを教えてください。はじめから通して読むのが苦手な人は、エピローグだけ読んでもいいかもしれません。それぞれ育った環境や年代は異なれど、思春期の危うさ、モラトリアムの苦悩、将来についての不安は誰もつきまとうもの。過ぎてみれば忘れてしまいがちな葛藤の跡をこんなにも克明に綴り、ご自身をさらけだしてみせてくれる清水眞砂子さんの自伝は、これから社会に出るみなさんにおすすめしたい一冊です。私は清水眞砂子さんほど明確な「青春の終わり」を意識はしませんでした。この本を読んだタイミングがまさに「青春の終わり」に近い時期だったと思います。すがすがしい気分を感じつつ、その後もあれやこれや悩む日々が続いています。清水眞砂子さんの自伝を通して、自分のなかに生まれる“違和感”と対峙することが、既存の価値観に縛られない私の生き方を考えていくことにつながるのだと改めて気づかされました。</p>		
茨木のり子集 : 言の葉 / 茨木のり子著. (筑摩書房, 2002.8-2002.10)	918/I11/1-3	図書館一般図書
<p>詩集に手を伸ばすことはこれまで滅多になかったのですが、茨木のり子さんの詩には二度も偶然めぐり逢いました。一度目は父が図書館から借りてきて勧めたとき。このとき私の心にひっかかったのは、「汲む」(1巻、124～126頁)という一篇。茨木のり子さんの詩には「倚りかからず」(3巻、70～71頁)や「自分の感受性くらい」(2巻、60～61頁)など、こう強くありたい、こう強くあれたらと思わせる詩があるなかで、「汲む」は弱い、自信のない私をそのままいいと思わせてくれるメッセージがありました。「大人になってもどぎまぎしたっていいんだな」、みなさんにどれくらい伝わっているかわかりませんが、授業中の私はしょっちゅう「どぎまぎ」しています。そして二度目の出会いは、授業で染色の話をするときに紹介しているドキュメンタリー番組「失われた色を求めて」のなか。「色の名」(3巻、90～91頁)という詩が俳優の奥貫薫さんによって朗読され、詩に出てくる日本の豊かな色名が、植物染めの美しい染めものとともに映し出されます。日本に古くからあった色の名前は、美しい言葉の響きをもつのだと、茨木のり子さんの詩と奥貫薫さんの朗読によって知ったのでした。</p>		
長いお別れ / 中島京子著. (文藝春秋, 2015.5)	913.6/N34	図書館一般図書
[関連展示] 長いお別れ / 中野量太監督.	778ZZ1-vd/N39	図書館視聴覚資料
<p>『長いお別れ』は認知症の男性(父親)をめぐる家族の物語で、父が帰省中に勧めた一冊でした。勧めた理由は、私の母が認知症をわずらっていたからです。母は今年に入ってすぐに緊急入院し、私が娘を出産した病院で亡くなりましたが、生前にこの作品を読んだとき、母との別れはもう始まっていたのだと気づかされました。認知症が進んでいることに気づかないうちに、あるいは気づいていないふりをしてる間に、母は私のよく知る母でなくなっていき、そのうちに母がどんな人だったのか、残念ながら鮮明に思い出せなくなっていました。『長いお別れ』を読んで、そして母を見送ったあとに思うことは、「お別れの始まり」にははっきりとした境目がないことでした。だからこそ、入院して余命いくばくと知られるまで、気がついていながらも何もできませんでした。認知症患者の家族の問題はこれからも多くの人が経験することになるでしょう。そして今度は私が夫や娘に介護されるときがやって来るかもしれません。祖母から母、母から私と繰り返された問題を、私から娘へとどう伝え、どう対処していくか、家族の問題としてだけでなく、社会制度や地域のサポート体制としても考えていかなければならないと痛感しています。</p>		